



2009年8月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2009年8月
第75号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久

咲き誇る夏



目 次

| | |
|--------------------------------|----|
| 漢点字の散歩 (14) (岡田健嗣) | 1 |
| 点字から識字までの距離 (71) (山内 薫) | 7 |
| 『常用字解』の編集について | 11 |
| 東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子) | 10 |
| 東京漢点字学習会報告 (菅野良之) | 13 |
| 見果てぬ夢を (17) (山本優子) | 17 |
| ご報告とご案内 | 20 |
| 再録・酔夢亭読書日記 (27) (酔夢亭) | 23 |
| 追悼・安田 章さん (岡田健嗣) | 24 |
| 追悼・高橋幸子さん (岡田健嗣) | 26 |
| 漢点字講習用テキスト(初級編・第16回) | 29 |
| 編集後記 (木下和久) | 31 |

漢点字の散歩（十四）

岡田 健嗣

五 点 字



「本稿では、〈点字〉をご存じない皆様も、点字をパターンとしてお受け止めいただければ充分です。点字で何が書かれているかを読み取る必要はありません。」

【余談】

この間何冊かの本を読んだ。

「英語点字」を三回、「ドイツ語点字」を一回分書いて、その都度考えるのが、「アルファベット」であった。拙稿で私は、「拡張アルファベット」という概念を仮想した。

ルイ・ブライユが創案した点字が欧米各国に伝播して、それぞれの言語にあった体系に仕上げられたが、ブライユが作ったのはアルファベット二六文字と句読符号、そして引用符などの文章記号であった。が残念ながらこれだけでは、触読するには使用者の満足を得られなかった。各国の言語にマッチした、触読し易い点字が求められたのである。その結果として、アルフ

ァベットの概念を拡張し、音節を点字符号の文字とし、さらに単語の綴りを簡略化するといった工夫がなされた。そしてこの工夫は、英語にせよドイツ語にせよ、それぞれ語学上の解析が試みられて、初めて叶ったものであった。

ここに一冊の本がある。今年のベストセラーである「ブリストとイカ 読書は脳をどのように変えるのか？」（メアリアン・ウルフ著 小松淳子訳、インターシフト）である。同書は、文字を読むという行為が、人の脳をどのように変えて来たか、について分析している。脳の活動電位の分布や変化を通して、読書という言語作用が脳の言語野を大きく拡張する様態を見出して、視覚言語である文字を、見直してみる必要があるというものらしい。

同書の前三分の一は、考古学上の成果を踏まえて、文字の発生からアルファベットの成立までを追っている。そこに極めて興味深い記述があった。

メソポタミア文明の発生は、シュメール文字によって確認される。それからギリシア文字の成立までに数千年を要している。しかもギリシア文字に直接繋がる文字は、まだ発見されていない。そこで欧米の考古学・言語学界では、まだアルファベットの概念が、確定されていないというのである。

ギリシア文字のアルファベットは、言うまでもなく

ルイ・ブライユの点字表

| | | | | | | | | | | | |
|-----|-----------|------------|------------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|--------|
| 1 : | 1 Aa | 2 Bb | 3 Cc | 4 Dd | 5 Ee | 6 Ff | 7 Gg | 8 Hh | 9 Ii | 10 Jj | Upper4 |
| 2 : | 11 Kk | 12 Ll | 13 Mm | 14 Nn | 15 Oo | 16 Pp | 17 Qq | 18 Rr | 19 Ss | 20 Tt | + 点字 |
| 3 : | 21 Uu | 22 Vv | 23 Xx | 24 Yy | 25 Zz | 26 ge | 27 es | 28 em | 29 β | 30 st | + 点字 |
| 4 : | 31 au | 32 eu | 33 ei | 34 ch | 35 sch | 36 ein | 37 er | 38 ue | 39 oe | 40 Ww | + 点字 |
| 5 : | 41 , | 42 ; | 43 : | 44 un | 45 or | 46 an | 47 eh | 48 te | 49 in | 50 ar | Lower4 |
| 6 : | 51 aeu | 52 ie | 53 ich | 54 ae | 55 des | 56 im | | | | | |
| 7 : | 57 ig | 58 lich | 59 lich | 60 ck | 61 ck | 62 ach | 63 ach | | | | |

子音と母音（音素）を表すもので、現在のアルファベットに直結している。ところがそれ以前の文字は、時代によっても場所によっても違うが、音素よりもむしろ音節を指示しているという。数も膨大だ。

そこで一つの考え方として、アルファベットを「音素」を表す文字符号として見る見方を採ってみる。するとアルファベットの成立はギリシア文字まで待たなければならぬ。逆に音節文字もアルファベットの祖型として容認して見ると、現在のアルファベットへの移行をどの時点と見るかが問われて来る。つまり古代文字とギリシア文字との断絶（ミッシングリンク）の部分が発見されれば解決されるのだが、現時点でどう考えるかは、議論百出だといっているのである。（もっとも私には、古代文字とギリシア文字とを結び文字が見つかれば、全てがはつきりするかどうか疑問であるのだが。）

この話から私に大変面白く思えたのは、現在ご紹介中の英語・ドイツ語の

点字の成立が、ちょうどこの反対の道筋を辿っているように見えることにある。ルイ・ブライユはアルファベットと句読符号を創案した。その後、それを受けて触読の便宜をはかる目的でアルファベットに準ずる音素符号を、次に一マスで表す音節符号を、そして一マス・二マスの符号で単語を表し、最後に縮字・縮語が考案されて、現在の体系が成立した。英語点字とドイツ語点字は、構成上多少の相違はあるものの、基本的に構造を共有している。つまり、アルファベットの概念は、極めて流動性に富んでいると見てよさそうだ。

そして同書を読んでもう一つ感じたのは、欧米人の考え方の基本に、アルファベットに対する強固な自信と自信が存在することである。二六文字という、極めて少ない文字で、全ての言語を書き表せるというこのアルファベットが、最高度に進化した、最も優れた文字だという強固な信念が、一貫していると読めた。

たとえば日本語のカナ文字については、「漢字で表せない日本語固有の文物を表すために作られた音節文字」であるとするだけで、日本語の表記が漢字仮名交じりを基本としていることには、ほとんど言及されない。フランスの構造主義哲学者は、「日本人は、漢字にカナでルビを振っている積もりだが、本当はカナに漢字でルビを振っているのだ」と言っているという。さすがである。

文芸評論家の柄谷行人氏は、明治時代の「言文一致」運動について、興味深いことを述べておられる。幕末から明治にかけて、欧米から大量に文物が流入した。その中に言葉があつた。欧米の書き言葉はアルファベットで表されるが、それは言葉の音を、視覚的な記号に置き換えたものであると理解し、それが独り歩きして、欧米の書き言葉は、話し言葉をそのまま文字

に定着したものだという見解に辿り着いた。だから欧米の言葉は整理され、効率的であつて、無駄がなく優れているのだ。それに引き替え日本語は、話し言葉と書き言葉が離れ過ぎているから、非効率で遅れている。話し言葉の音を表す文字で、書き言葉も表されるべきだ、というのがその運動の発端だったという（「日本近代文学の起源」）。このような見解はアルファベットへの大きな誤解と、先進諸国への圧倒的な劣等意識と、国際競争への言い知れぬ不安が導いたものと言つてよい。一般論としては、明治四十年代には「言文一致体」が完成して、その後の日本語の表記は、それに従つて行われているとされている。しかし柄谷氏は、「言文一致体という、新たな文体が創出されたのであつて、言と文が一致したのではない」と言われる。欧米の書き言葉も、決して話し言葉をそのまま文字に定着したものではなく、「書く」という意識のもとに書かれたものであることには、我が国の文章

と変わりはないと言われる。

加えて氏は、西欧の言語はギリシア以来、発音が文字に優先していて、文字は言語の音を記号化したものに過ぎないと考えられて来た。そのために文字の機能は、音声言語を保障するものと位置付けられていると言われる。日本語とその表記を欧米の考え方で理解しようとするれば、必ず破綻すると言われる。

さて点字に関して言えば、現在も「言文一致」以前の場合が続いている。拙稿では、欧米の点字が、言語学上の検討を経た後に、現在使用されているものが成立したことを明かしたいと考えるものである。というのは我が国の従来 の点字は、極めて心許ない状況に置かれているからである。二〇〇九年現在でも、カナ文字だけの表記に甘んじて、日本語の表記の基本である漢字仮名交じり法を、触読文字に実現しようという動きは、公式には全くない。唯一漢点字の運動だけが、その非力にも関わらず、継続しているのである。

2 ドイツ語点字 (2)

* 本稿では、ドイツ語の点字表記をご紹介しますのだが、ドイツ語の表記について、二つの約束事を決めておきたい。一つは、“a・o・n”のウムラウトである。通常タイプライターでは \ddot{a} を後置して表すので、ここでもそれに倣う。従って“ae・aeu・oe・ue”

という表記になる。またドイツ語では“sz”を一文字で表すが、通常タイプライターでは“B”を代用して当てる。しかし本稿では本来の“B”との混同を避けるために、“B”を使用する。

③ 音節略字

ドイツ語点字でも英語点字と同様に、拡張アルファベットの次に、一マスで表される音節略字がある。

ach (~ s e e d) al (~ p c b r d)
an (~ f f g b k) ar (~ t w t)
be (~ t t h e t) ck (~ k u u l e)
eh (~ m l) ein (~ w d Rh I d w)
el 'y (yfe wyt juwy) em (~ s fr d at)
en 'c (cde scse trenc) er (~ bc g n l r)
es (~ p c w c n) ge (~ bot b c waa)
ich (~ l t r r) ig (~ f ur l pz)
in (~ dic w d h) Ich (~ p f t h f)
ll 'q (~ oge nuq) mm 'x (~ Saxyn lax)
or (~ dnc d t) te (~ n t wet)
un (~ ruhe m d katt)

以上の二三個が音節略字である。ただし“er”は長母音、“ck”、“ll'q”、“mm'x”は重子音であるので音節略字とは言えないが、ここではその中に含めて数える。

◇英語点字との相違

ドイツ語の単語は、多くが「語頭・語幹・語尾」の三つの部分に分けられる。そのために英語に比較して、音節略字を多数必要とした。またそのために点字符号の分類が、英語点字とは別様になった。

a. 英語点字では、“Lower 4 dots sign”「 $\cdot\cdot\cdot\cdot$ 」は、優先的に句読符号に当てられ、また“right side 3 dots sign”「 $\cdot\cdot\cdot$ 」は、主にニマス略字を指示する符号であった。「 $\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot$ 」のパターン・九個の点の組み合わせの符号で一つの単語を表し、単語の要素となった場合は、“ $\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot$ (sometimes) $\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot$ (everyday) $\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot$ (Germany)”のように、一点分の幅のスペースが前置される形になる。一マス略字は、原則として単語のどの位置にも使用できる。“ing $\cdot\cdot\cdot$ 、ple $\cdot\cdot\cdot$ ”の二つだけは、語頭に置くことができない。これは例外的処置である。

ドイツ語点字では、「 $\cdot\cdot\cdot$ 」と「 $\cdot\cdot\cdot$ 」の点字符号も、音節略字として使用される。そのために句読符号やその他の符号との混同を避ける目的で、精緻な約束事が定められている。(ここでは、最小限のご紹介に留める。)

この音節略字の使用に当たっては、事例の単語のように、「語頭音、語中音、語尾音」全てに使用できる訳ではなく。“low sign”「 $\cdot\cdot\cdot$ 」は語頭音、あるいは語

尾音のどちらか、または両方ともに使用できないし、“right sign”「 $\cdot\cdot\cdot$ 」と「q`x` $\cdot\cdot\cdot$ 」は、語頭音には使用できない。

b. アルファベットの“c`q`x`y`”の四文字は、ドイツ語の表記に使用される頻度が少ないという理由で、音節略字として使用されることになった。

英語点字では、アルファベット一文字を、一つの単語を表す符号として使用するが、ドイツ語では、さらに音節符号としても使用することに踏み切っている。頻度は少ないとは言っても、本来のアルファベットとして使用することもある。そんなときはどうするか? そんな場合は点字の常套ではあるが、符号を前置して表す。“Aufhebungspunkt” (返還符号) 「 $\cdot\cdot\cdot$ 」(6の点)を“c`q`x`y`”の四つの文字に前置すると、略字ではなく、本来の文字であることを示すのである。

$\cdot\cdot\cdot$ C $\cdot\cdot\cdot$ bon (Carbon) A $\cdot\cdot\cdot$ quam $\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot$ (Aquamarin)
Te $\cdot\cdot\cdot$ xt (Text) S $\cdot\cdot\cdot$ y $\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot\cdot$ (system)

c. 英語点字では、“and $\cdot\cdot\cdot$ 、for $\cdot\cdot\cdot$ 、of $\cdot\cdot\cdot$ 、the $\cdot\cdot\cdot$ 、with $\cdot\cdot\cdot$ 、in $\cdot\cdot\cdot$ ”の六文字が、音節文字として、また単独の単語として使用された。

同様にドイツ語でも、“an $\cdot\cdot\cdot$ 、ein $\cdot\cdot\cdot$ 、er $\cdot\cdot\cdot$ 、es $\cdot\cdot\cdot$ 、ich $\cdot\cdot\cdot$ 、in $\cdot\cdot\cdot$ ”の六文字は、音節文字として、また単語

として使用される。

d. 英語点字にはなかったことだが、ドイツ語の単語は、「語頭、語幹、語尾」に分けられることが特徴である。そしてそれぞれの綴りには、決まった形式がある。例えば、「 β 」（“sz”）は、必ず語幹か語末にある。しかも母音を背負っている。その条件に合わないところでは、「 β 」は現れない。従って「 β 」を表す点字符号「 ⠋ 」は、「 β 」の現れる条件でないところでは、別の綴りを表す略字として用いることができるのである。このような考え方を他の文字や点字符号にも拡大して、その機能を複合化した。

以後ご紹介する略字は、以上の考え方に基づいて定められている。

④前綴り略字

ドイツ語では、単語の語頭部の綴りを「前綴り」、語幹部を「中綴り」、語尾部を「後綴り」と呼ぶ。これまでにご紹介した略字は、ドイツ語の文章・単語全般に適用されるが、ここでは前綴りのみに適用されるものをご紹介する。

aus= ⠠ ruhe (ausruhe) ent= ⠠ nt= ⠠ ff= ⠠ nc
(entfernen) ex='x' xamc (examen)

pro='q' qbl= ⠠ (problem) ver= ⠠ ⠠ b= ⠠ d (verband)

この五個の点字符号と文字が、「前綴り略字」である。これらは全て、既に使用されている点字符号である。一つの点字符号の機能の多重化が、ここに見られる。

“aus”を表す点字符号「 ⠠ 」は、“VolIschrift”（総綴り字法）の重母音“au”を表す点字符号である。“ent”を表す点字符号「 ⠠ 」は、「 β 」（“sz”）を表す点字符号である。“ex”を表す“x”は、文字“x”であり、音節略字として、“m”を表す文字である。“pro”を表す“q”は、文字“p”であり、音節略字として、“l”を表す文字である。“ver”を表す点字符号「 ⠠ 」は、ドイツ語点字の「ハイフン」を表す点字符号である。

以上のように、これらの点字符号と文字は、従来の意味で語頭に来ることはない。従ってこれらが語頭にあれば、必ず「前綴り略字」として読むことができるのである。

（“Leitfaden der BlindenvollIschrift” und “Kurzsc
hrift” 1973 Blindenstudienanstalt Marburg La
hn）

（続へ）

点字から識字までの距離（七一）

著作権法改正（上）

山内 薫（墨田区立あずま図書館）

一九七五年一月一九日付け読売新聞の都民版に、「愛のテープは違法」の波紋」という記事が載った。中見出しには「点字がわり、声の本」無断録音（著作権法違反）とわかる。小石川図書館」とある。文京区立小石川図書館では一九七三年一二月から視覚障害者を対象としたカセットテープの貸出を始めたが、蔵書は落語や浪曲などの市販カセット・テープの他に日本点字図書館等から借りた文学書のテープを複製して貸出を行っていた。これに対して日本文芸著作権保護同盟が「悪用ではないが、公共機関だけに法律を守ってほしい。」とクレームをつけ、実情調査をするという内容の記事が載ったのである。ここで法律と言っているのは著作権法のこと、同法第三七条（点字による複製等）では、著作権の権利制限として第一項で点字を取り上げ、点字による複製については営利・非営利を問わず、また複製者や複製場所についても限定せずに全く自由に複製することを認めている。しかし録音による複製（当時は第二項、現在は第三項）については、「点字図書館その他の盲人（後に視覚障害者に変更）

の福祉の増進を目的とする施設で政令で定めるものにおいて、もっぱら盲人向けの貸出しの用に供するために、公表された著作物を録音することができるとしており、著作権法施行令第二条で定められた施設の中に公立図書館は含まれない。そのため、この事件以降公立図書館では著作権者の許諾を得なければ視覚障害者用の録音資料を作成することができないということになったのだった。

従って公立図書館が録音資料を作成する場合には、著作権者の許諾を得てから資料を作成するため、許諾の返答がなければ何時までも資料を作成できず、仮に著作権者が許諾を拒否すれば利用者に音声資料を提供できないということになってしまう。丁度同年十月二十五日の大阪新聞は「恍惚の人」お聞かせできません！老人には残酷すぎる！有吉さん録音断る」という記事を載せているが、寝たきり老人から自著をテープで読ませてほしいという要望が図書館を通してあったが「内容的にみても本人がショックを受けるのでは」と拒否したというのだ。著作権法上視覚障害者であれば点字図書館から録音資料を借りて読むことができるが、視覚障害以外の理由で本を読めない人たちは『恍惚の人』という、どこの本屋に行っても平積みにされていて、誰でも買って読むことができるベストセラーを読むことができないことになる。インタビューに答えて有吉佐和子は「寝たきり老人の方にお聞かせする

のは、内容的にみて残酷だと思ひ断つた。自衛手段をもたない人に、恐怖感を与えるのはいけないと思う。図書館の人も無神経です。」と回答しているが、こうした暴論が著作者の権利として主張されてしまうことは、横暴以外の何者でもないであろう。

このように、一般の本をそのままでは読むことのできない多くの読書障害者の障壁となつていた著作権法の改正案が本年六月十一日に参議院文教科学委員会でも可決され、来年の一月一日から施行されることが決まつた。件の第三七条は「点字による複製」が「視覚障害者等のための複製」に改められ、第三項は次のように改められる。

「三 視覚障害者その他視覚による表現の認識に障害のある者の福祉に関する事業を行う者で政令で定めるものは、公表された著作物であつて、視覚によりその表現が認識される方法（視覚及び他の知覚により認識される方法を含む）により公衆に提供され、又は提示されているもの（当該著作物以外の著作物で、当該著作物において複製されているものその他当該著作物と一体として公衆に提供され、又は提示されているものを含む。以下この項及び同条第四項において「視覚著作物」という。）について、専ら視覚障害者等で当該方式によつては当該視覚著作物を利用することが困難な者の用に供するために必要と認められる限度において、当該視覚著作物に係る文字を音声にすることその

他当該視覚障害者等が利用するために必要な方式により、複製し、又は自動公衆送信（送信可能化を含む。）を行うことができる。ただし、当該視覚著作物について、著作権者又はその許諾を得た者若しくは第七五条の出版権の設定を受けた者により、当該方式による公衆への提示が行われている場合は、この限りでない。」

つまり今までは専ら視覚障害者のみを権利制限の対象としていた著作権法が、「視覚による表現の認識に障害のある者」に改められたことによつて、大きな文字でなくては読めない弱視者や高齢者、文字の読みに障害のある学習障害者などもその対象として認めるようになったのである。また「文字を音声化することその他当該視覚障害者等が利用するために必要な方法」には、以前紹介したマルチメディア・デジタル化を始めとして、知的障害者のためのやさしく読みやすくなりライトなども含まれるようになる。

参議院文教委員会では同日「著作権法の一部を改正する法律案に対する附帯決議」がなされたがその中で

「三、障害者の情報アクセスを保障し、情報格差を是正する観点から、本法の運用及び政令の制定に当たつては、障害の種類にかかわらず、すべての障害者がそれぞれの障害に応じた方式の著作物を容易に入手できるものとなるよう、十分留意すること。

四、教科用拡大図書や副教材の拡大写本を始め、点字図書、録音図書等の作成を行うボランティアがこれまで果たしてきた役割にかんがみ、今後ボランティア活動が支障なく一層促進されるよう、その環境整備に努めること。」とされている。

今回の著作権法の改正には、昨年の六月に衆議院文部科学委員会及び本会議において全会一致で可決した「障害のある児童及び生徒のための教科用特定図書等の普及の促進等に関する法律」（いわゆる「教科書バリアフリー法」）の成立も影響している。従来の著作権法では第三三条の（教科用図書等への掲載）で「公表された著作物は、学校教育の目的上必要と認められる限度において、教科用図書（小学校、中学校又は高等学校その他これらに準ずる学校における教育の用に供される児童用又は生徒用の図書であつて、文部大臣の検定を経たもの又は文部省が著作の名義を有するものををいう。次条において同じ。）に掲載することができる。」とし、著作物を教科書に掲載できるだけでなく、第四三条の規定に基づいて著作物を翻訳・編曲・変形・本案して掲載することが認められていた。しかし弱視の子どもたちに必須の拡大教科書については教科用図書として認められていなかったために、弱視者団体や拡大教材作成グループなどからの働きかけによって教科書バリアフリー法が成立したのだった。この法律の成立に伴って著作権法第三三条の第二項は次

のように改正された。

「教科用図書に掲載された著作物は、視覚障害、発達障害その他の障害により教科用図書に掲載された著作物を使用することが困難な児童又は生徒の学習の用に供するため、当該教科用図書に用いられている文字、図形等の拡大その他の当該児童又は生徒が当該著作物を使用するために必要な方式により複製することができる。」

ここでも、弱視児を対象とした単なる拡大に止まらず、「当該著作物を使用するために必要な方式による複製」が認められマルチメディア・デジタル教科書を始めるあらゆる方式による提供が可能になったのである。

可決された当日の参議院文部科学委員会で民主党の参議院議員那谷屋正義氏の「複製等を行うことのできる主体というものの、政令で定めるものというふうになっておりますが、これは一体どこまで拡大をされるのか。」という質問に対し、政府参考人として文化庁の高塩至氏は「広く公共図書館や関係の事業を行っております民法法人などが新たな対象になり得るといふことを考えておりまして……」と回答している。

今回の改正によって、巻頭の事件から実に三五年の歳月を経て、公立図書館で様々な読みの障害者に対して録音その他の資料の作成と貸出が自由にできるようになるのである。

「東京漢点字羽化の会」例会報告と

わたくしごと

木村 多恵子



第43回例会 2009年6月10日(水) 13:30

15:30、ヒューマンプラザ第1会議室

「漢文の読み方」を入力するためにレ点など訓点の他にまだまだいろいろな記号が必要なことが起き、どの括弧を使えば、点字での読みが分かりよいか、岡田さんはじめ、皆さんで相談して、時間はあつという間に終わってしまった。

第44回例会 2009年7月8日(水) 13:30

15:30、ヒューマンプラザ第1会議室

「羽化」74号を6月20日の学習会のときにお配りした。

今月も「漢文の読み方」の入力方法について、先月の続きで終了した。これさえきちんと決まれば、仕事の半分、あるいはそれ以上仕上がったようなものではないかと思う。

七月の学習会はいつもの第三土曜日は、プラザの会

場が取れず、第二になったので、出席者がやや減りそうなので、とくに送迎をしていただく方を確認した。学習会用テキスト四巻の点字と、墨字を準備すること、とくに墨字版はガイドヘルパーの方が必ずしも一定していないので、余裕をもって作ることにした。

* 予告

8月の例会(第45回) 2009年8月12日(水)

13:30~15:30 7階第二会議室

第29回学習会 2009年8月22日(第4土曜)

18:30~20:30 7階第一会議室

9月の例会(第46回) 2009年9月9日(水)

13:30~15:30 7階第一会議室

第30回学習会 2009年9月19日(第3土曜日)

18:30~20:30 7階第一会議室

わたくしごと

わたしが持っているアンテナはごく小さく、しかも感度が鈍い。それでも、ときどきあつと驚くような経験をする。

いつものように恥さらしをするのだけれど、最近まで、「ドングリと山猫」や「風の又三郎」など、宮沢賢治の作品をあまりおもしろいとは思わなかった。多

分最初に「ドングリ」を読んだときは、まだ点字を読むのが遅く、短い一つの文章さえ切れ切れになり、意味が分からなかったからであろう。しかも、「ぼくが一番大きい」とか、「ぼくが一番つやつやしている」とか、自慢争いだったような気がする。（本当は、今、原文に当たるべきなのは承知している。賢治ファンには大いにしかられるだろう）。それに自分の生活とはかけ離れていて、全体が掴めなかったからであろう。最近、この本を読み返したこともなければ、ラジオでの紹介も聞いていないので、「ドングリ」や「又三郎」の粗筋も確認していない。従って、今読んだならもう少し見方はちがうのかもしれない。

ところがある時、雪嵐の中で小さな男の子が、必死に嵐に立ち向かっているが、とうとう倒れてしまう。けれども雪嵐を起こしている「雪ばんご」に使える「雪わらし」が、その男の子をわざと雪の上に倒して、雪布団をかけて命を守る話を聞いた。（これもワサワサと掃除をしながらのことなので、ただ「宮沢賢治作」と、タイトルもいい加減に聞き過ぎた。それでも温かい気持ちになり、「宮沢賢治っていいんだ」と見直す？気分になった。さらに、「グスコープドリ」の伝記」というのを、15分番組で放送したので聴いた。これが衝撃的であった。東北地方の飢饉続きの厳しい貧しさの中で、父は去り母も二人の子供を置き去

りにして何処かへ消え去る。恐らく兄妹だけなら生きてゆけるだろう、生き抜いて欲しいと希望を託して、二親は餓死を選らんだのである。やがて、妹もさらわれ、ブドリは一人残された。山瀬が吹くと冷害に見舞われ、飢饉と凶作が、人々を不幸にしていることが分かり、山瀬の被害から、農民を救うことに身を捧げる。彼は貧しさの中でも本を読むことだけは怠らなかつた。そして、気象学を学び山を爆破し地球の温度を上げる。執行に当たって、自ら犠牲者となるのである。

賢治を少し読んでみようか、と思い、先ず詩の数編を漢点字で読めるようにしていただいた。

すると、「夏蚕飼育の辛苦を了えて」という、文字を見なければ意味が分からないところがあり、特に詩は漢字が必要だと痛感した。

また、次のような稲を哀れむ象徴的な断片も、わたしの心を締め付けた。

あらゆる辛苦の結果から

七月稲はよく分蘖し

豊かな秋を示していたが

この八月のなかばのうちに

十二の赤い朝焼けと

湿度九十の六日を数え

茎稈弱く徒長して

穂も出し花もつけながら
ついに昨日のはげしい雨に
次から次と倒れてしまひ
うへには雨のしぶきのなかに
とむらふやうなつめたい霧が
倒れた稲を被っていた：

（校本 第四巻―詩Ⅲ 「春と修羅 第三集」より
「和風は河谷いっぱいに吹く」、筑摩書房 昭和48年
初刷）

この筑摩書房の、賢治全集の構成が、どうなっているかを、図書館の職員に教えていただいた。童話と詩との分け方、作品の配列はどうなのか。職員は凡例が沢山あります、と言って世に発表したものと未発表のもの、使われた原稿用紙の種類によって、どれを第一とするか、など、言われてみれば、研究者というものはこのように細密なのだと思つて驚嘆してしまつた。

さらに驚いたことには、「グスコブドリの伝記」について観ていただいているとき、自分の迂闊さ加減に仰天した。「グスコブドリの伝記」は、最初「ペンネンネンネン・ネネムの伝説」が元にあつて、次にそれが「グスコブドリの伝説」となり、さらに「グスコブドリの伝記」となり、賢治の死の前年の

昭和7年に「児童文学」に発表されたのだという。ここからがわたしの恥ずかしいことなのであるが、この「ペンネンネンネン」と聞いて、あるコンサートを思い出した。

夫を送ってまだ日の浅い頃、コンサートに誘ってくださった方がいた。そこではわたしがわず一枚のCDで慰められていたことで、そのコンサートの中で、関連の曲も歌われるから、というのでおつくうながら行くことにした。わたしの興味は第二部だけであつた。勿論プログラムも解説も読んでいただいたので、今日の出し物の、「ペンネンネンネン」が「グスコブドリの伝記」の元であることも読んでいただいたのに、会が始まると、ほとんど同時に朦朧状態に陥っていた。こんなことは主催者を初め、そのスタッフに対して失礼極まりないことである。けれどもその頃のわたしには、どうしても心が解けず、ただ一つのことだけにしか関心は向いていなかったのである。

従つてもっと最近になつて、全く思いがけない方から、「宮沢賢治私感と童話朗読」のDVDをいただき、それを聴いているうちに、わたしが賢治に初めて興味を抱いた童話が「水仙月の四日」であることが分かり、「グスコブドリの粗筋を教えてもらい、さらに「風の又三郎」に書かれた内容が、氣象学的に優

れていることも教えられた。

わたしが賢治の一連の事柄について、もっとも感動したのは、ブドリ（賢治）が子供ながら、よりよい本を読むこと、頭のなかに収めただけでなく、現実を見据えて実働していることである。

「水仙月の四日」の雪わらしが、そつと雪の布団を掛けてやり、子供の父親が、子供を見つげやすいように工夫し、父が、息子を見つげると、しずかに引き下がる。

「ブドリ」も飢饉を引き起こす山瀬を防ぐ手段を研究し、自ら危険なことをその身に負う。

それにしても賢治自身、六歳、九歳、十歳のとき、さらに死の前後に早瀬（飢餓風）が吹いて、厳しい冷害にあっているという。東北地方は長い間、この災いを受け続けてきたのだ。

もう一言付け加えさせていただきたい。わたしが「賢治の詩は漢字が難しい」と言うとき、ある方が「そうとばかりは言えません。たとえば妹のとし子さんの死を詠んだ、永訣の朝は漢字が少ないです。お母さんに読んで欲しかったからだと思います。」と教えてくだされた。この言葉の重さをひしひしと感じているわたしである。

東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

平成21年度 第2回（第26回）報告

1 日時 平成21年5月23日（土）

18時30分～20時33分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室

3 出席者（省略）

4 使用教材 「漢点字講習用テキスト 初級編

第三回（全十回）」点字編、墨字編

5 冊）
レズライター…思、胃、油、典、悪、応、係、
孫、泳、混、財、社、証、徒、道、貧、参考（冊、

5 学習会内容

（1） 前回の復習

・口 ㄣ（1・2・4・5の点）を含むが漢点文字符号に反映されない文字。

「絹 ㄣㄣ」

6. 漢数字および第1基本文字を部首とした文字（6）

「季」

* 女 ㄣ（1・3・4・6の点）をパーツとして含

2009年7月29日

む文字四つ。

「委」、「好」、「姉」、「妹」

* 田 (1・3・5の点) をパーツとして含む文字四つ。

「男」 力の元の意味は「未」で、田で力を出し、働く男を表す。

(2) 今回の学習内容 テキスト第三回、複合文字

(1)

6・漢数字および第1基本文字を部首とした文字

(6)

* 田 (1・3・5の点) をパーツとして含む文字四つ。(うち、男は前回学習)

「田」には、田畑の意味と、物が中に沢山詰まっているとか、沢山集まっているという意味がある。

100 「細」 糸偏(1・2の点)と田で表す。字式は糸+田。音読みのサイは呉音、セイは漢音。熟語に「細心」「子細」「繊細」「些細」「委細

「細君」「細道(ほそみち)」「細波(さざなみ)」「細雪(ささめゆき)」「細石(さざれいし)」「細魚(さより)」「事細(ことこま)か」「心細(ほそい)」。セイの読みとして「細男(セイノオ)」「奈

良の春日大社の祭りで登場する6人の男など)」「他に

「亜細亜(アジア)」がある。

101 「思」 田と心(ル下がり) 2・5

・6の点)で表す。字式は田/心。音読みのシは漢・呉音。訓読みに、おぼすがある。「おもいう」には想、憶、念の字もある。熟語に「思索」「不思議」「思慮」「相思相愛」「思い出」「片思い」「思(おぼ)し召し」「思惑(おもわく)」「他に「成吉思汗(ジンギスカン)」もある。

102 「胃」 田と肉(ラ下がり) 2・6の点)で表す。月は肉づきの意味。字式は田/月。音読みのイは漢・呉音。熟語に「胃酸」「胃壁」「胃炎」「反芻胃(ハンスウイ)」「胃下垂」「胃拡張」など。

* 由 (1・3・5と4の点)、曲 (1・3・5と5の点) をパーツとして含む文字一つずつ。「由」は壺の形を象つたもので、突き出た部分は首、田の部分は胴体。「曲」は竹で編んだ籠を象つたもの。

103 「油」 由と第2さんずい(4・5・6の点)で表し、墨字とは左右逆。字式は、さんずい+由。植物から出た油を指し、動物から出たものは「脂」を使う。音読みのユは呉音、ユウは漢音。熟語に「給油」「肝油」「ユウとしては「油然(ユウゼン)」など。場所に「夏油温泉(ゲトウオンセン)」；岩手県南西部にある温泉。石灰華の段丘は特別天然記念物」がある。

104 「典」(1・3・5の点)と八

(1・2・5の点)で表す。字式は、適切な表現方法が見当たらない。音読みのテンは漢・呉音。訓読みに「ふみ」名前に「すけ」「つね」がある。熟語は「特典」「出典」「典範」「聖典」「香典」など、国名に「瑞典(スウェーデン)」がある。

* 心(ル下がり) 2・5・6の点)が下に付く文字二つ。

105 「悪」(1の点)と心で表す。字式は厶/心。音読みのアク、才はいずれも漢・呉音。訓読みに「あ・し」がある。常用字解には、墓室を指し忌まわしい意味を持つとある。熟語に「悪銭」「悪夢」「悪用」「悪態」「悪食(アクジキ)」「悪戯(アクギ、いたずら)」「悪寒(オカン)」「悪熱(オネツ)」「悪知恵」「気味悪い」「善し悪し」「悪しからず」など。

平成21年度 第3回(第27回) 報告

- 1 日時 平成21年6月20日(土) 18時30分～20時30分
- 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室
- 3 出席者(省略)
- 4 使用教材

「漢点字講習用テキスト 初級編

第三回(全十回) 一点字編、墨字編

レーザーライター…応、應、係、孫、泳、混、財、社、証、徒、道、貧

5 学習会内容

(1) 連絡事項

- ・「うか第74号(2009年6月)」配布。
- ・6月11日付 毎日新聞朝刊に漢点字の紹介記事掲載。

関連で、毎日新聞仙台支局より仙台放送で、5分間の枠で放送することと、男性の読者より学習会への参加希望の連絡あり。

(2) 前回の復習

* 田(1・3・5の点)をパーツとして含む文字。

「細」、「思」、「おも」には、思… おもい悩む。憶… 昔をおもう。想… 普通におもう。念… 考えさせるおもい方。の四つがある。

「胃」(田の部分、一杯詰まっているという意味を持つ。)

* 由(田と4の点)、曲(田と5の点)をパーツとして含む文字

「油」(さんずいは液体を表わす。漢点字では左右逆に表示する。)

「典」(曲と八で表わす。曲の近似文字。八は賢台を意味する。)字式は、べき乗曲・八。

* 心 (ル下がり) が下に付く文字。 「悪」

(3) 今回の学習内容 テキスト第三回、複合文字 (1)

6・漢数字および第1基本文字を部首とした文字(6)

106 「応」 まだれ (ヨ・3・4・5の点) と心 (ル下がり・2・5・6の点) で表す。字式は 广 (まだれ) > 心。旧字の「應」は人の胸に鳥を抱いている形を意味することから、广は人の体の胸を意味し、応は胸で神の答を受け止めるという意味がある。音読みのオウは呉音。訓読みに「まさ」に「名前に「まさ」として用いられる。熟語には、「順応(じゆんのう)」「否定(いやおう)」「相応」「応戦」「適応」「歯応え(はごたゝえ)」「読み応え(よみごたゝえ)」「相応しい(ふさわしい)」などがある。

* 系 (イ下がり・2・3の点) をパーツとして含む文字2つ。

107 「係」 人偏 (ナ・1・3の点) と系

で表す。字式は 人偏 + 系。細いものでつながっているという意味がある。音読みのケイは漢音。熟語には「係官」「係員」「係船(けいせん)」「係留(けいりゆう)」などがある。

108 「孫」 子 (2・4・6の点) と系

で表す。字式は 子 + 系。音読みのソンは漢・呉音。熟語に「子々孫々」物語に「孫悟空」神話に「天孫降臨(てんそんこうりん・天照大神の命を受けて、孫の瓊杵尊(ににぎのみこと)が高天原(たかまがはら)から日向国の高千穂に天降ったこと)」。他に「公孫樹(いちよう)」、地名・人名に「我孫子(あびこ)」などがある。

7・漢数字および第1基本文字を部首とした文字(7)

点字 p56、墨字 p21

109 「泳」 さんずい (ニ・1・2・3の点) と永 (4) で表す、永は氷 (4・5・6の点) の近似文字。字式は、さんずい + 永。水の流れが永く続いていることからきている。音読みのエイは漢音。熟語には「競泳」「力泳」「遊泳」など泳ぎに関するものが多い。他に「電気泳動(蛋白質等の分析法の一種)」「や韓国の人名として「金泳三(キム・ヨンサム)」などがある。

110 「混」 さんずいと昆 (4・5の点) で表す。字式は、さんずい + 昆。昆は日/比。音

読みのコンは漢音。訓読みに「こゝむ」がある。熟語には「混合」「混在」「混声合唱」「混載」「混在」「玉石混淆(ぎよくせきこんこう)」「混ぜご飯」などがある。

見果てぬ夢を（十七）

山本 優子

十六 見はてぬ夢を



孝之進が生前語っていたとおり、葬儀は数人の教会員の手伝いを得てひっそりと行われた。それが済んでしまうと、増江と千代は手を取り合って泣き伏した。慰めあうこともできず、祈りあうこともできず、長い時間暗い部屋で泣きじやくった。

だが、訓盲院は残った。こうしている間も、盲児たちが食事も与えられず、寒々とした院舎で途方にくれているはずだ。とうとう千代が言った。

「増江さん、私たちには何をする力もありません。お金もありません。だから主が働いてくださることがはっきり見えてくるに違いありません。祈りましょうか」

増江は、涙をぬぐってうなずいた。

二人は、ひれ伏して一心に祈った。

「主よ、あなたに頼るのを忘れていたことを赦してください。訓盲院の子供たちを助けてください……」

どれくらいの間、祈り続けたであろうか。増江は、主の声をきいたような気がした。

（行け）と。

（我、汝を遣はさむ）

増江は、決心をした。

（主よ。わたしたちを通して働いてくださると信じます）

夫召天の報せの手紙を久留米の実家にもしたためたところ、さっそく父今村虹助から返事が届いた。増江への心配をにじませた手紙だった。もう充分がんばったのだから、訓盲院のことは人にまかせ、実家に帰ってくるのが良からうと勧める内容だった。厳格だったのが老いてますます円満になってきた父の姿が浮かぶ。

増江は、手紙を繰り返し読みながら涙を流した。早くから長男仁一郎（にいちろう）に家督を譲り、読書や書に静かな日々を送り老いていく父だった。その父を想わない日はなかった。自分のせいで、父は積極的に生きる意欲を失くしたのではないかという痛みも感じてきた。両親への心配と、自分自身のことを理解してもらいたいということもあり、増江は多忙な中、何度か神戸から久留米の実家を訪れていた。

神戸に落ち着いてから初めて恐る恐る実家を訪れた

時のことを、増江は忘れることができない。孝之進との結婚を断じて許そうとしなかった巖父虹助は、目を潤ませて増江を迎えた。そして、まずひとこと、

「食べるものは、充分か？」

と、尋ねた。増江は母すゑや兄仁一郎、弥三郎（やさぶろう）と共に楽しいひと時を持った。

帰り際に虹助は、

「左近允さんのところに籍を入れなさい」と、諭すように言った。実は増江は孝之進との婚姻の届けをしていなかった。若いころ東京で平塚雷鳥（ひらつかりいちよう）や神近市子（かみちか いちこ）らとの出合いを持った増江には、女性が夫の家に嫁ぐという日本の婚姻制度のあり方への問題意識があった。戸籍制度のもたらす差別、弊害に関しても考え続けていた。孝之進との出会いによって、女性の人權問題と盲人を始めとする「弱者」差別、蔑視問題が増江の中でつながった。増江が左近允家に籍を移さなかったのは父の反対によってというよりも、増江自身の選択だった。孝之進は、何よりも増江の意思を尊重しようとしたし、受洗してから、教会で牧師の司式によって簡素に神の前での結婚の誓約式してもらったから、それで増江は満足していた。が、その後帰省するたびに虹助は増江の籍のことを口にした。最初増江は今村家の

ため世間体を気にしてのことだと思っていたが、父が娘のことを許し、孝之進と共に取り組んでいる働きを陰ながら応援する想いを持ってくれているのを感じるようになった。

ある時は、思い切って長兄仁一郎に訓盲院の経済的援助の必要をそれとなく話した。仁一郎は、

「考えてみる」

と、言った。そして、弥三郎と共に、かなり多額の寄付金を増江に渡してくれた。驚いたことには、帰りに父までが、

「おまえたちに結婚祝いをまだ渡していなかったな」

と、言って、兄たちからのもの以上の金額の入った包みを増江に受け取らせたのだった。

孝之進を喪って、増江は孝之進のことで共に涙を流せるのは千代だけだとよくわかった。千代は人前では目立とうとしない地味な女性だった。が、毅然とした強さと愛を感じさせ、それほど学問をしたわけではないのに知恵があった。人を支え助けることを心底喜んでいた。増江はいつの間にか千代を誰よりも信頼できる母、同じ信仰に立つ姉妹として慕うようになっていた。ある時、増江はふと思いついたことを甘えるように千代に言ってみた。

「お義母様、わたし、お義母様の娘だったらって、つくづく思うわ。養女にしていただけたらなあ」

意外にも千代は言った。

「増江さんさえ、その意思があるのなら、左近允尚一、千代の養女ということでもいいんですよ」

冗談など言わない人だっただけに増江は驚いた。千代の想いを測りかねた。その時はそれだけで話がとぎれたが、あとで千代の言ったことが気になってきた。

（孝之進とわたし、この世では夫婦だったけれど、天国に籍のある兄弟姉妹どうしなんだから、お義母さんの娘として籍に入れていただいてもいいかもしれない）

千代に改めてそのことを切り出すと、千代は微笑んと言った。

「世間体を恐れない増江さんらしくて、楽しいわ」
こうして、増江は孝之進召天後約五ヶ月後に左近允千代の養女として今村家から左近允家に籍を移した。

さて、訓盲院では、関係者たちとの合意の中で、これまで孝之進が担っていた設立者兼院長という役職を分け、増江が設立者、主任教師森泰蔵が院長を勤めることになった。増江にやりくりの責任がのしかかってきた。当時は、家賃四年間の滞納が千数百円にのぼる

財政危機に瀕していた。貧しい盲児への給食給衣によってというだけではなく、点字出版所六光社の採算を度外視した欠損の負担によって、そうなってしまうていたのだ。増江は、篤志家の間を奔走して資金調達に努めた。が、寄付はあまりにも乏しすぎた。盲児たちに食べさせる米すら買えない。とうとう増江は意を決して二人の盲児に大八車につかまるように命じ、それを押して街に出た。

「失礼します。神戸訓盲院の者です。院生への給食のためにお米を少しいただけないでしょうか」

一軒一軒まわり、米を乞うのである。そのうちに、盲児たちに物売りの手伝いまでさせることになった。

「学校があんな物乞い行為をさせるなどは……」
と、いう非難や蔑視の声が聞こえてくる。増江はそれに対して耳を覆い、一合でも多くの米を集めるために大八車を押した。かつて完成した点字新聞「あけぼの」を孝之進と共に大八車で押して運んだときも貧しかった。けれど、心は弾んでいた。今はその日その日、盲児たちを飢えさせないためにがむしやらに働いている……挫けそうになりながらも、増江は動きまわるほかなかつた。

院長となった森泰蔵も、訓盲院の建て直しのため資金集めに尽力した。質素な生活を信条とし、中途失明

者でありながら、わずかな電車賃をも節約して、激しい寒風の吹く夜でも雪解け道でも歩いて患者を見舞い、後援者を訪ねるのだった。生徒たちには厳しいが、温かい父のように慕われていた。増江も、森を尊敬していたが、孝之進存命中から意見が合わない時がしばしばあった。孝之進が教養を高めるために普通科を重視したのに対し、森は盲人の自立のための技術教育を重視したためだった。資金調達に赴く時も、森は必ず紋服に身を整える。まっすぐな姿勢で慰懃にさわやかに語る森は、誰からも一目置かれていた。そんな森が、着る物にも構わず、髪を振り乱して盲児と共に近所をまわって米を乞う増江のやりかたを快く思うはずがなかった。

「左近允さん、物乞いのようなことはやめてくださいませんか。子どもたちを卑屈にさせ自信を失わせませんし、ますます訓盲院への信頼を失墜させてしまいませんか」

森に諭されると、増江はついむきになってしまふ。「おっしゃることは、わかりますわ。でも、こうしないと、今日子どもたちは食べるものがないんです。今は他にどうしようもないのが、おわかりにならないんですか」

森は、言葉を飲み込むのだった。

(つづく)

「」報告と「」案内

一 計 報

本号では、本会に関係の深い、お二人の計報をお伝えしなければならなくなりました。悲しみとともに申し上げます。

①安田 章 さん

安田章さんは、二〇〇九(平成二十一)年、三月二十二日、胃癌のためご逝去されました。

安田さんは本会代表の岡田の友人で、以前より本誌をご愛読下さっておりました。二〇〇三年から、お仕事の傍ら、NPO法人設立に尽力なさり、その定款に、漢点字の普及活動を盛り込んで下さいました。

翌年から本誌にも「酔夢亭」の筆名でご執筆下さるようになり、七十一号(二〇〇九年十二月)までほぼ欠かさず書いて下さいました。「酔夢亭読書記第二十八回」が、絶筆となりました。

NPO法人・トータルヒューマンネット21を立ち上げて、メインの活動である知的障害者のグループホームの運営も軌道に乗ったところで、漢点字の活動も形



にしたいと、東京で、漢点字訳ボランティア・グループを立ち上げることにしました。そして二〇〇五年、東京漢点字羽化の会が誕生したのでした。

安田さんは同会の立ち上げにも積極的にご支援下さり、二〇〇七年に始まった、視覚障害者向け漢点字の学習会も、会員とともにお骨折り下さいました。

昨年十月、突然入院され、闘病生活に入れられ、ご自身のご意志で、ご自宅で永眠されました。そしてご家族によって野辺送りされました。

安田さんを偲んで、本誌六十九号（二〇〇八年八月）にご執筆下さいました、「酔夢亭読書日記、第二十七回」を再録させていただきます。ご精読下さい。

② 高橋 幸子 さん

高橋幸子さんは、二〇〇九（平成二十一年）年、六月二十六日、胃癌のためご逝去されました。

高橋さんは、横浜漢点字羽化の会の立ち上げ時から会員で、何時も活動の中心にいて下さいました。

漢点字による漢字仮名交じり法は、考えてみれば誰も試みていない分野です。一步を踏み出せば、必ず足跡が遺ります。そんな時に高橋さんは、極めて適切な助言、意見であったり質問であったりをして下さいま

した。一定の水準の書籍の、原文を損なわずに、しかも触読し易い漢点字文を表すという作業は、思えば決して容易に叶うものではありません。そういう作業を通して高橋さんは、漢点字書を構築するノウハウを、着々と積み上げて下さいました。これは私達の最大の財産であり、自信と誇りの原点でもあります。

高橋さんは、昨年・二〇〇八年の十一月に入院されました。既に手術ができないほどに進行しておられました。しかしその後も、入院の合間に、活動を続けて下さいました。五月五日の定例会・漢点字講習会までご出席下さり、それが最後の活動となりました。

安田さん、高橋さん、私達は相次いで友を失いました。しかしお二人の遺されたものを、大事に育てて行きたいと思えます。

ご冥福をお祈り申し上げます。

二 横浜国立大学の公開講座

横浜国立大学人間科学部教授・村田忠禧先生が、この一〇、十一月に、三回に渡って公開講座を開かれます。

内容は以下の通りです。

シリーズ 現代中国を知る 1

建国60年の歩み 10月10日(土) 13・30〜16・30

建国60周年を迎えた中国。その歩みを毛沢東、鄧小平、胡錦濤という三人の指導者の思想と政策を対比しながら、共通するものは何か、変化したものは何か、どのように変化したのかを明らかにし、今後の中国の行方を考える素材を提供します。

シリーズ 現代中国を知る 2

少数民族政策 11月7日(土) 13・30〜16・30

中国は56の民族で構成される多民族国家であるが、漢民族の割合が91%と圧倒的であるため、中国＝漢民族と見がちです。中国が実施する民族区域自治の実情はどうなのか、とりわけチベットの実態はどうなのか、具体的に紹介していきます。

シリーズ 現代中国を知る 3

日中関係を考える 11月28日(土) 13・30〜16・30

日本にとって中国は隣邦であり、経済面での相互補完関係は強まり、政治的にも険悪な時期は過ぎ去りました。しかし必ずしも相互信頼関係が樹立されている

状態とは言えません。何が原因であり、どうすれば改善させていくことができるか、具体的な案件を通して明らかにしていきます。)

何れも会場は、常盤台キャンパス 1000円
100名(一般) 3回受講の場合は 2500円

問い合わせ先:

横浜国立大学教育人間科学部 総務係 公開講座担当
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2

電話: 045-339-3255 FAX: 045-339-3264

E-Mail: edu.kokaikoza@nuc.ynu.ac.jp

三 朝日新聞の取材を受けました

朝日新聞の文化欄の記者・白石明彦さんの取材を受けました。

いよいよ社会が、漢点字を「文字」として認知して下さるようです。しかしながら、なおさら一般の文字と同様の機能を、この漢点字に發揮してもらわなければなりません。

漢点字使用者の奮起が問われていると言っても過言ではありません。

記事は、十一月に掲載予定とのことでした。

左は、「うか」六十九号（二〇〇八年八月）より再録するものです。

酔夢亭読書日記 第27回

酔夢亭



某月某日。

警視庁を見学。見学に行くのは2回目である。内堀通りの向う側にはご存知桜田門があり、桜田通りを挟んでは、法務省の赤煉瓦棟がかいま見える。警視庁の中には警察参考室というものがあつて、じっくり観察してみれば、なかなかおもしろいものである。美人婦警さんのガイドも感じが良い。山田風太郎描くところの「警視庁草紙」のイメージからすると初代警視総監の川路利良は、かなりの切れ者、神経質そうな感じがしたのだが、実際の写真をみると眼がくりくりつとして人なつつこく感じられるが、さてどんなものであろうか。

極悪非道なことをした犯罪人を如何に裁いて、罰するか。「市中引き回しの上、はりつけ獄門」なんて判決、こりやすごい。磔の図も、獄門の図も展示されていて結構なまなましい。磔にされた挙句、槍で急所を差しつらねかれ、最後は首を切られ、その首がさらしものにされる。刑罰は見せしめのためにあるというこ

とがはっきり分かる。

警視庁は桜田門の前に建っているので、桜田門といえは、警視庁の代名詞。そして、桜田門外の変。NHKの大河ドラマ「篤姫」で井伊大老を演じている役者の親父さんがかつて大村益次郎役だったのだから、感慨深い。その井伊大老が出勤途中に暗殺団に襲われる。その乱闘の模様を杵築藩の江戸藩邸の窓から見つめていた者の記録によれば、「その様 真剣は程隔て、せり合うよし、昔より聞及び候へ共、左はなく（そうではなく）、刀半ば又は鐔方際（つばもとぎわ）にてせり合い」、その結果、「乱闘後の雪の上には斬り落とされた多くの耳や指が残ってい」たというから、生々しい話だ（吉村昭 「史実を歩く」 文春新書）。

警視庁が創設されたのは、明治7年1月15日のことだそうだが、「およそ維新前文久二、三年から維新後明治六、七年のころまで、十二、三年の間が最も物騒な世の中で」、「東京に居て、夜分は決して外出せず」、「欠落ちものが人目を忍び、泥棒が逃げてまわるような風で、誠に面白くない」（福沢諭吉 「福翁自伝」） 危険な時代であった。

「明治元年官軍の江戸進駐と同時に、江戸町奉行所は市政裁判所と改められ、ついで進駐諸藩の藩兵が市中取締りにあたり、二年六月、版籍奉還以後は、お備

いの府兵なるものがその任につき、四年十一月に至って邏卒という制度が出来たのである（山田風太郎「明治断頭台」明治小説全集）。「当初は、地方の警備や武力的鎮圧を行う軍務官（のちの兵部省）と犯罪捜査等を行う刑法官（のちの刑部省）、反政府陰謀やテロの偵察を行なう弾正台の三本建ての制度であった」とのこと。

(<http://blog.goo.ne.jp/yousan02/e/6acba0322a5b5281b0e83498a8f2106c>)

山田風太郎の「明治断頭台」では、川路利良は太政官弾正台大巡察として登場する。そして、「警視庁草紙 上・下」の舞台は明治六年の十月二十八日のまだ早い朝、西郷隆盛が東京を離れる場面から始まる。そのとき、川路の肩書きは司法省警保寮大警視である。

「警視庁草紙 上・下」は、しかし、川路大警視が主人公ではなく、実は、もと南町奉行所八丁堀同心千羽兵四郎である。

「幕臣たちの明治維新」（安藤優一郎 講談社現代新書）を読むと幕臣たちの維新後の悲惨さがひしと迫る。悲惨な日常を我慢して生きていくと、悲惨が悲惨を呼ぶような事態が生じてきて、ちよつとゆううつになつてくる。

思うに、ここで、起死回生の心ときめくことを夢想するのが、夢やぶれた人間たちにとっての最後のより

どころであるのかもしれない。さて、夢破れ、現実生活にも破綻した後、起死回生の秘術があるやなしや？

以下次号

追悼 安田章さん

岡田 健嗣

安田さん、大兄が本誌『うか』に〈酔夢亭〉の筆名で執筆して下さるようになって、どれだけ経ったのだろう。再会してからも五年は越えたはずだから、号数にして三十号分は書いて下さったことになる。執筆ばかりでなく、製本と発送にも、大きな力になって下さった。

大兄に初めて会ったのは四十年近く前になる。明治学院大学のキャンパスだった。小生は盲学校を出て社会に適応できずに、モラトリアムを決め込んで明治学院に潜り込んだのだが、随分と新鮮な体験をさせてもらった。

当時は、視覚障害者を受け入れる大学は少なかった。明治学院は、その数少ないうちの一枚だった。学校は、小生が社会福祉学を専攻するものと思っていたようだが、なぜか経済学を選んじまった。

学校が始まって一月ほど経ったころだったか、小生はだんだん慣れて来て、サークルとやらを見聞しようという気になった。そうして大兄等に遇ったのだ。

時を経て互いに五十路を越えたころ、本誌を見てくれた大兄からメールが届いた。何度かやり取りしたのだが、その内容はこうだ。(安)「貴殿は何で漢点字に血道を上げているのだ？そんなものは、やりたい人は放っておいてもやるに違いない。貴殿にはもつと別にやることがあるのでないか？」、(岡)「いやいやそうではないのだ。漢点字がここにある、と言っても現在の視覚障害者は、やろうとしない。」、(安)「そんなのは放っておけばいいんだ。」、(岡)「そうかもしれない。だが小生の過去を思うと、それも言っておられないのだ。」、(安)「どういうことだ？」、(岡)「どういうことって？」、(安)「貴殿にとって漢点字が、それほど貴重なものとも思えないのだが……？」、(岡)「いや違うのだ。この漢点字を学んで、小生は初めて漢字の世界を知ったのだ。」、(安)「……。そうかな？そんなことないんじゃないかな？」、(岡)「そうなんだ。」、(安)「全く気付かなかった！だが当時(大学時代)、結構話しに着いて来ていたと思うが？文盲でそんなことができるのだろうか？」。

大兄は、大学時代の小生が文盲であったことに気付かなかった。小生は隠す積もりはなかったが、積極的に申し出ることもしなかったが、気付いていないとは思わなかった。また蒙を啓かれた思いがした。

我が国の識字率は九九・八%(?)という。だが視

覚障害者の文盲(漢字を知らない)率は、ほぼ一〇〇%である。つまり今も一〇〇%隠し果せていることを意味する。文盲は隠せるのである。

その後大兄は、東京漢点字羽化の会の設立に尽力して下さり、何かと世話役を買って出ても下さった。本誌にも執筆して下さい、発行の作業にも加わって下さった。

現在身体障害者は、バリアフリーを盛んに標榜している。「社会のバリアをなくせ！」と言うのである。そして最後には、心のバリアもなくせ、と言う。だがよく聞いていると、心のバリアという語を口にするのは、福祉関係者の健常者ばかりである。障害者自ら社会に向かつて、心のバリアをなくせとは言わない。いや恐らく言えないのだ。

実は大兄等に教わったことで最も大きかったのは、「言葉の両義性」ということだった。言葉はどのようなでも使えるなどというのではない。発する者、聞く者、読む者の意とは関わらず、言葉はその様態を変容する。このバリアという語もそうだ。

バリアという語はこの場合、社会の側の「障壁」という意味合いで使っている積もりらしい。だがもともとは自らを保護するための壁という意味もある。してみると、その側面から彼らの言うバリアを見ることもできるはずだ。もしそうであれば、バリアフリーが本当に実現してしまうと、困るのは障害者自身ということ

とになりはしまいか？そして小生に見えるのは、社会制度上置かれている「文盲」というバリアは、社会参加を最も阻害している障壁であるのだが、しかも社会参加という厳しい現実から守ってくれている、最も頼もしい保護壁でもあるのだ。このようなバリアが最も強力に守っているのは、さてどういう人たちなのだろうか？彼ら自身、このことには全く気付いていないように見えるが…。

大兄等は文盲であった小生を、分け隔てなく受け入れてくれた。かなり乱暴なやりかたではあったが、本の読み方を教えてくれた。いや音訳を買って出てくれたりもした。そんな中から小生は、自分なりの本の選択法を会得したように思う。

視覚障害者が読書をするというのは、言うまでもなく点訳者・音訳者の手で、新たに作られた本を読むことを言う。（「読む」？ここでは「読む」としておう。）書店で購入したり図書館で借りたりすれば読めるものではない。読みたい本が既に作られていることもほとんどない。新たに作られなければならない。それを担って下さるのが点訳・音訳のボランティアである。本会の活動もその中に含まれる。当時大兄等は、そういうことまで買って出してくれた。そのようにして、小生のバリアを壊してくれたのだ。

大兄よ、文盲は苦しい。だが大兄等のような心優しき力持ちは意外に少ない。もっと強力に彼のバリアを

破壊しなければ、彼らが言うバリアフリーもノーマライゼーションも、一握りの特権階層を創出するだけに思えるのだが…。

本当にありがとうございます。

追悼 高橋 幸子 さん

岡田 健嗣

ずっと待っていました。だが…：

高橋さんと初めてお目にかかったのは、横浜漢点字羽化の会を立ち上げるための講習会だった。一九九六年の一月三十一日だった。

高橋さんは当初、お勤めをしながらのご参加だった。そのために定例会にもなかなかお出かけになれず、暫くは言葉を交わすこともなかった。しかし直ぐに、熱心に活動に取り組んで下さっていることが分かった。

横浜漢点字羽化の会の活動は一九九六年に始まったが、次の一九九七年には、横浜国大の村田忠禧先生と横浜市議の大滝正雄先生のご尽力で、「漢字源」(藤堂明保編、学習研究社)の漢点字版・全九十巻を完成させて、横浜市中央図書館に納入することができた。その後毎年、漢点字訳書を一、二タイトル納入している。

視覚障害者の読書は、点訳や音訳のボランティア活動が支えている。点訳書や音訳書は、書店では購入で

きないし、希望する本が図書館にあるとは限らない。むしろないのが普通と言ってよい。本会の活動もボランティア活動として、漢点字書を製作するものである。

発足後何年か経って、活動も滑らかに進むようになったところ、高橋さんと言葉を交わす機会が増えた。お酒がお好きなことも知った。当方も嫌いではないことから、年に何回かではあったが、お誘いするようになった。

高橋さんは普段は余計なことをおっしゃらない方だった。お酒が進むとお口も緩んで、冗談も言われた。楽しいお酒だった。

ある時、「岡田さんは何で、(漢点字の活動を)こんなに一所懸命やってるの?」と聞かれた。「高橋さんこそ?」、「わたしは暇だからよ。ああそうか、岡田さんも暇なのね?ふふっ!」(そんなはずないでしょ!:)といたずらっぽく笑われた。普通なら目と目を合わせるところだが、私にはそれができない。

こんなことも言われた。「岡田さんみたいな人が、あと何人かいればね、漢点字もぐつと広がるのになえ!」こんなことは普段はおっしゃらない。だが漢点字の普及、視覚障害者の識字が遅々として進まないことに、常に心を痛めておられたのである。勿論私のような者が何人もいる必要はない。言葉を一般の水準で使えるよう、努力を惜しまない人が現れること、それ

だけだ。そうすれば否応なく漢点字が求められるのである。

高橋さんは、本会の活動にご参加下さる前に、従来のカナ点字の点訳活動をなさっておられた。ところが何か物足りない。「カナ文字だけで分かるのかしら?しかもひらがなとカタカナの区別もない。」これは最も素朴な疑問だが、もう一つ、「こういう本を読みたいのかしら?」と、点訳に供される本への疑問も湧いた。何か毒のない、味の薄い本ばかりが取り上げられるのだ。「ああ、視覚障害者の人たちは、こういう本が好きなんだ」と思っている時に、本会の漢点字訳ボランティアの募集広告をご覧になった。

さて入ってみると全く素人の集まりで、手際は悪いし、いったい何を説明しようとしているのかさえ分からない。だが読書に対する熱意だけは感じられる。そんなこんなで巻き込まれて、面白ささえ感じるようになってきてしまった、とおっしゃった。

本会の活動が始まって直ぐに、高橋さんは活動の基本である「朝日歌壇・俳壇」の漢点字訳と、「横浜通信」の製作のグループにご参加下さった。そしてたちまちパソコンによる打ち込み、校正、編集、点字プリンタによる打ち出し、発送という、一連の工程の取りまとめをお引き受け下さった。

漢点字書を製作するといっても、現在では点筆で一

点一点手打ちするものではない。パソコンで普通の文書を普通に打ち込むのが作業の始まりである。打ち込まれた文書は、一旦プリントアウトして、原本と比較する。これが文字の間違いなどをチェックする校正作業である。校正は三名の目で行われる。

ここまでは一般の文書を作成する作業と同様である。この後に、漢点字への変換と編集の作業があり、一冊の漢点字書のファイルが完成する。高橋さんはこの打ち込み・校正の作業を差配し、変換・編集の作業を一手にお引き受け下さったのである。

このようにして諸書籍の漢点字訳の取りまとめを一手にお引き受け下さって、現在中央図書館に所蔵されている、何方にも手にしていただける漢点字書は、粗方高橋さんの手によって編集されたものである。図書館の所蔵書を含めて、主な漢点字訳書を挙げてみると、「論語」、「唐詩選 上・下」、「孔子伝」、「初期万葉論」（白川静）、「珠玉百歌仙」（塚本邦雄）、「近代日本語の思想 翻訳文体成立事情」（柳父章）、「百人一句」（高橋睦郎）、「微笑笑俳句コレクション」（江國滋）その他である。

そして二〇〇三年から始まった漢点字講習会用のテキストの取りまとめ、その前年から私が受講した放送大学のテキスト（国文系）の取りまとめなど、ほぼ全ての取りまとめを担って下さった。

このような取りまとめの作業から、如何に読み易い漢点字書を作るかのノウハウが、厚みを増していった。こうして高橋さんは、漢点字の活動の今後に、軌道を敷いて下さったのである。

足かけ五年になろうか、白川静先生の「常用字解」を漢点字訳しようというプロジェクトに取り組むことになった。ここでも高橋さんが取りまとめをお引き受け下さって、これまでのノウハウに加えて、文字の字形の説明のために、川上泰一先生の考案になる「字式」を取り入れることにし、その研究に取り組むことになった。昨年二〇〇八年度・中央図書館に、その前半を納入した。完成の間際まで、字式の表記を、高橋さんと私は膝詰めで検討したのである。

私は学生時代には恩師と呼べる方に巡り会えなかった。不徳の故である。だが本会の活動を始めてからは、よい方がお集まり下さった。皆さん師と呼びたい方ばかりである。中でも高橋さんは、師であるばかりでなく、よい友でもあり、同志と呼ばせていただいた方だった。高橋さんは、「常用字解」の後半を、ご自身の手で仕上げるお積もりだった。私も、ご回復を信じていた。

有る程の菊抛げ入れよ棺の中

夏目漱石



漢点字講習用テキスト

初級編 第16回

3 複合文字 (1)

6. 漢数字および第一基本文字を部首とした文字 (6)

(94) 季  キ すえ

「禾 」の下に「子 」を置いた形の文字です。穀物の実りを表す文字です。一年を四つに分けて、「春・夏・秋・冬」と言いますが、これらを総称して「季 節」と呼びます。また「すえ」と読んで、この「季 節」の最後の意味を表します。漢点字では、「 (禾)」と「 (子)」で表されます。

「季節」「季語」「季題」「季春」「季秋」「四季」

※「女 」を部首として含む文字四つ。

(95) 委  イ ゆだ-ねる まか-せる

「禾 」の下に「女 」を置いた形の文字です。「禾 」は、稲の穂が垂れた形を表している部首で、下の「女 」とともに、柔らかくたおやかに曲がっていることを表しています。「ゆだねる・まかせる」と読んで、人に預けて任せきる意味を表します。漢点字では、「 (禾)」と「 (女)」で表されます。

「委員会」「委任」「委嘱」「委譲」

(96) 好  コウ この-む す-く よ-い

「女 偏」の右側に「子 」を置いた形の文字です。女性が子供を大事に慈しむ様子を表す文字と言われます。「このむ」と読んで趣味や好みの意味として、「すく」と読んで、愛情表現に用いられます。また、「よい」と読んで、好ましいもの、よいものの意味をも表します。漢点字では、「 (子)」と「 (女)」で表されて、左右が逆になっています。

「好意」「好運」「好悪」「好敵手」「好き好み」「好き嫌い」

(97) 姉  シ あね

「女 偏」の右側に「市 」を置いた形の文字です。兄弟姉妹のうち、年長の女性を指します。また、年長の女性を敬愛して呼ぶ語でもあります。漢点字では、「 (女)」と「 (市)」で表されます。

「兄弟姉妹」「兄姉」「姉さん」

(98) 妹  マイ いもうと

「女 偏」の右側に「未 」を置いた形の文字です。「未 」は、まだ伸びきっていない木の枝を表しています。兄弟姉妹のうち、年少の女性を意味します。また、年少の女性や妻を慈しむ語としても用いられ



ます。漢点字では、「𠃉 (女)」と「𠃉 (未)」で表されますが、「𠃉」は「未」に当たりますので、本来は「𠃉」としなければなりません。しかし、「𠃉」を採用しますと、他の文字と重なりますので、このようになりました。

「兄弟姉妹」「兄妹」「妹御」

※「田𠃉」を部首として含む文字四つ。

*「田𠃉」は、既に出て来た「畑𠃉」のように、田畑の意味を表す場合と、「果𠃉」のように、田畑とは関わりのない、別の意味を表す場合があります。後者は、中に沢山詰まっているもの、ものが沢山集まっている様子を表します。

(99) 男𠃉 ダン ナン おとこ

「田𠃉」の下に「力𠃉」を置いた形の文字です。田畑で力をふるって働く、力強い男性を表しています。漢点字では、「𠃉 (田)」と「𠃉 (力)」で表されます。

「男性」「男女」「長男」「次男」「一男一女」

(100) 細𠃉 サイ ほそ - い ほそ - る こま - かい
こま - やか ささ - い ささ - やか

「糸𠃉偏」の右側に「田𠃉」を置いた形の文字です。この「田𠃉」は、赤ちゃんの頭にある泉門を象ったもので、細いすじを表しています。偏の「糸𠃉」も細いという意味を表して、偏・旁、双方ともに細く細かいという意味を表します。漢点字では、「𠃉 (糸偏)」と「𠃉 (田)」で表されます。

「細工」「細密」「細胞」「細菌」「詳細」

(101) 思𠃉 シ おも - う

「田𠃉」の下に「心𠃉」を置いた形の文字です。「田𠃉」は、「細𠃉」の「田𠃉」と同様に、赤ちゃんの頭にある泉門を象ったもので、頭を表します。「心𠃉」は心臓です。この文字は、頭と心で細かく思いめぐらす様子を表します。漢点字では、「𠃉 (田)」と「𠃉 (心)」で表されます。

「思案」「思想」「思考」「思念」「意思」「もの思い」「思いがけない」「思い違い」「思い人」

(102) 胃𠃉 イ

「田𠃉」の下に「月 (肉) 𠃉」を置いた形の文字です。食べたものが沢山入った、肉でできた袋、つまりイブクロです。この「田𠃉」は、ものが沢山詰まったものの意味です。漢点字では、「𠃉 (田)」と「𠃉 (肉)」で表されます。

「胃腸」「胃袋」「食道・胃・十二指腸」

編集後記

▼当会、特に岡田さんにとって大切な方が、2人も相次いで亡くなりました。岡田さんが、どんなにお力落としされているか、想像に難くありません。安田さんとは、初め岡田さんを介しての間接的な知り合いでしたが、NPO法人の立ち上げや「東京漢点字」の立ち上げの頃から直接お会いする機会も増えました。とにかく、実行力のある方で、岡田さんの活動を陰で支える実に頼もしい親友のようでした▼本誌が一時安田さんのNPO、トータルヒューマンネット21と共同発行されていたとき、お忙しい中を毎回のようには遠方から印刷・製本作業に参加下さって、大きな戦力となっていたいただきました▼一方、高橋さんは、岡田さんの追悼文にありますように、横浜漢点字羽化の会の発足当時からメンバーで、その当時から古いお付き合いということになります。ただ、私としては担当した分野の違いで、彼女の仕事ぶりを肌で感じたのはずっと後になってからのことです。岡田さんの文により、私の知らない分野での彼女のすばらしい業績が認識され、あらためて当会における彼女の存在の大きさが理解されます。と同時に、その重要な人を失ったあとの当会の活動について、一抹の不安を覚えざるを得ません▼どうぞ安らかに眠り下さいと祈るばかりです。

(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は10月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。